里短歌会　6月詠草

はるけきと思ひし八十路も疾く過ぎてまた新しき朝を迎ふる　岡本トシ
蛇口全開バケツの水をザブと撒き今日一日を終わりとなさむ　宮本淑子
夕暮れを草取り居れば親蛙ひとつが鳴けば一斉になく　川口敦子
万葉の恋歌聴きつつ眠る夜明日香・三輪山訪ひし日遥か　園田トミ子
七七忌はや過ぎ姉は遠つ世に亡きはらからと何を語らふ　松岡節子
登りきて二〇三高地より見はるかす旅順の港は霧の立ち込む　松本幾代
かの夏に命残れる特攻の夫は八十路の日々を耕す　山城雅子
動員の地下工場に敗戦を嘆きて泣きし遠き夏の日　林　淑子
幼子を置き去りにするごと帰り来ぬ施設の義父に雨の降りゐむ　上田安代
語彙忘れ出て来ぬ友との語らひも苦笑し続く楽しきままに　安見朱實

万句の里俳句会　6月句会

民宿に一期一会の遍路かな　中路郁子
山梔子の香に染まりたる一日かな　北村妙子
雨を待つ彩の乾きし四葩かな　平山邦子
あでやかな影のゆらぎし菖蒲園　宮本雅子
魚籠提げて父の背ナ追ふ夏の川　林　まつ子
火口へと続く草原風薫る　冨田幸子
万緑に少しつかれて旅終る　松永久子
朝涼や農を楽しく思ふ時　鋤本トミ
橋渡り来よとて河鹿しきり鳴く　田中ひさ子
万緑の底に五木の唄のこる　東　鈴子
急逝を悼みて沙羅の花静か　稲田羚子
木天蓼の花の清しや渓の風　梅田昭子

肥後狂句桜会　例会入選句集より

クラス会　禿げとるほうが生徒かい　田尻浩風
戻り道　大漁の日は遠回り　小川繁美
戻り道　磁石のごたる縄のれん　狩野本六
爺ちゃんの　墓には花より酎がえええ　髙倉新米
クラス会　社長もここじゃそねくれん　高木房恵
爺ちゃんの　元気なわけは腹八分　窪田明徳
爺ちゃんの　婆ちゃんの名も知らっさん　田中孝幸
爺ちゃんの　孫だけにゃモッコスで無ァ　光堀善教
クラス会　高嶺の花はまだ一人　藤野清子
爺ちゃんの　話相手は植木鉢　須藤新生
今が旬　筍はひこずりにさす　上村〇子
目障り　裸でさろく風呂上り　田中レイ子

泗水短歌会　6月詠草

枯山水の一隅を占むる花菖蒲むらさきのみの咲きに咲き満つ　福原美智子
裏山の笹の葉揺れてチチチチと枝にやどるか夕闇せまる　矢野悦子
一時刻指して止まりし幾年か柱時計に父の影追う　高藤タツノ
青葉分け梅ちぎりたる日を顕たせ独りの梅干作らんともぐ　長尾はるみ
ビオラの葉まだらの虫が食みつくし蝶となれるや真昼を舞い舞う　中山定子
歩行器を始めてにぎる喜びと不安交々一歩ふみ出す　平嶋きくえ
今年はや半年過ぎると思う間もこつこつと秒針刻む　大島きと

庭の木々自由に伸びて枝繁り小鳥囀る音楽会らし　宮本峯子
二世帯の暮らしに活き活き身の回りおさな漕ぎ行く車輪の軽し　吉安永子

せせらぎ俳句会　6月例会

百歳の師の手にありし梅雨の冷え　村山数恵
初夏の風きらめく港光る沖　寺本和子
父の日や遺影に供ふ登山帽　服部静子
盛り上がり迫り来るかに若葉山　五丁義昭
菖蒲田に一句を得たく俳廻す　藤本邦浩
句会場のコップに挿して花しのぶ　藤本アツ子
霊柩車発つサイレンに梅雨しとど　内村泊虹
夕立に遭うて急ぎし帰り道　（高一）渡辺一史
トマトの実大きくなるほど垂るる茎　（高一）渡辺大寿

肥後狂句水笑会　6月例会

連休明け　家事は押しやりごろ寝さす　中島五女
蚊取り線香　犬小屋三つつけとらす　御手洗三代
蚊取り線香　本なんぎゃって寝入っとる　吉岡三水
せっこうで　医者より坊主呼んでくれ　神尾迫水
かき集め　ブラになわした腹の肉　宮上美由
美人は損　そぎゃん損ならしてみたか　続　義昭
美人は損　整形だろて思わるる　井手水光
連休明け　金も元気ものうなった　平井紅彩
かき集め　おとしいっぴゃ入れとらす　柏原乗仏
せっこうで　お祝い言うた通夜の席　山隈好茶

七城短歌会　6月詠草

咲き盛る庭の紫陽花に降りそそぐ朝の雨が艶めき連れきし　岩津涼子
蒔きし小豆いのち逞し日照りつづく乾土の畑を今朝に芽を出す　水田紗陽子
購いし夏帽子冠り映しみる鏡のわれの幾許若やぐ　下川つぎ
音もなくそぼ降る雨に紫陽花の一際映ゆるわが庭の朝　木下陽子
訪ねくる八十路の友の土産にと幼日たどりお手玉作る　吉間充子
花つくるなりわいなれば老い我の仕事もそこそこありて生きつぐ　高木　精
二人目の男の子生れしと息の知らせわれそっと拭く目尻の涙を　森　道子
苗床の緑葉育む水清き流れに沿う道吾の散歩路　斉藤芳子
葉ざくらの揺るるに誘われ窓に立つ入院二日目日の出に遇えり　松岡ミチエ
誕生日祝いてくれし娘孫重ねし年を礼に遣りたし　池田カツ子

旭志文芸俳句会　6月詠草

朝なさに色増しゆくや麦の秋　水谷ミネ
連休の疲れ癒すや青葉風　東　芳子
奥阿蘇の山椒を苞に京の旅　芹川蓉子
豆蔓の伸びて柵越ゆ夏近し　中尾ヨシコ
菊挿すや我老いたれば休みつつ　出田みとり
咳ひとつ苗代寒合けさの冷え　芹川のり子
鞍岳の新緑の山美しく　郷　ミヤ子